

事例3 学びに向かう 「土台」づくり

「語彙・読解力検定」の概要

名称／語彙・読解力検定

開始時期／2011年 検定試験開始（予定）

実施時期／年間2回（6月・11月）

対象／小学生／社会人まで対応

11年は、高校生・大学生レベルからスタート

出題領域

① 辞書語彙…国語辞典に掲載されている語句・ことわざ・四字熟語・慣用句・故事成語などの意味や用法を出題。社会生活の中で使用される一般的な語句の知識を確認する。

② 新聞語彙…朝日新聞に掲載されている用語を、「社会」「科学技術」「医療生活」「文化」の四つの分野から出題。新聞を読む上で必要な語について、基本的な語（繰り返し登場する語）と時事的な語（その時々々のニュースを読むのに必要な語）の二つの観点から知識を確認。

③ 読解力…朝日新聞の「天声人語」や社説、

自ら学び、考える力を育てるために 「語彙・読解力検定」開始

2011年、朝日新聞社とベネッセコーポレーションが共同事業「語彙・読解力検定」をスタートさせる。学力の基礎である語彙力、読解力を高校や大学は今日のように捉えているのか。検定概要と共に紹介する。

*いずれも予定です

コラムなどを使った読解問題を出題。文中の語句の意味を問う問題を中心に、部分的な理解、全体的な理解を確認する問題も出題し、総合的な読解力を測定する。
検定の設計／学習指導要領には準拠しないカリキュラムフリー設計。各級ごとに試験を行い合格を判定。

対象者	等級	到達イメージ
社会人 大学生	1級	趣味・教養、企業研修
	準1級	就職、大学教養修了
高校生	2級	難関大学受験
	準2級	一般大学受験、高校卒業
中学生 小学生	3級	高校受験、中学卒業
	4級	中学段階の学習レベル
	5級	小学段階の学習レベル

*級設定など詳細は予備実査の分析結果から設定

学校で培うべき力と 社会で必要な力を総合的に測る

思考力や判断力、 表現力の向上が目標

生徒の読解力や表現力の低下を指摘する学校現場の声は多い。「OECD生徒の学習到達度調査（PIISA）」でも、日本の子ども読解力低下の傾向が明らかになっている。このような中、新学習指導要領では、国語だけでなく各教科で「言語活動の充実」がうたわれ、語彙を豊かにし、思考力や判断力、表現力を高めることがすべての教育段階で重視されている。また、中学3年の国語では「論説や報道などに盛り込ま

れた情報を比較して読む」など、「新聞や雑誌の活用」が「言語活動」の例として盛り込まれている。

語彙問題と、新聞の記事を使用した読解問題で構成された「語彙・読解力検定」は、語彙の知識だけでなく、語彙の運用力や読解力をあわせて測定することで、課題を明らかにし、思考力や判断力、表現力を高めることにつなげたいと考えている。学校で培われるべき力、社会で必要とされる力を総合的に評価できる検定試験となるよう、2011年の実施に向けて開発が進められている。

「語彙・読解力検定」問題イメージ（2級相当）

Ⅰ：語彙問題

問1 次の語句の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「入念」

- ① 忘れないでおくこと
- ② 信仰の道に入ること
- ③ 心の中で唱えること
- ④ 細かい点まで注意すること
- ⑤ 一つのことを思い悩むこと

問2 次の意味を表す語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「目的を遂げるために大変な労苦に耐えること」

- ① 堅忍不拔
- ② 苦心惨憺
- ③ 臥薪嘗胆
- ④ 捲土重来
- ⑤ 孤軍奮闘

問3 次の語句の用例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「すずなり」

- ① 朝からすずなりの電話で、仕事が手につかない。
- ② 話題作を見ようと、映画館にはすずなりの客が駆けつけた。
- ③ 手帳を見ると、来月は予定がすずなりだ。
- ④ 大学図書館には、本がすずなりに並んでいる。
- ⑤ 9月も半ばになって、ようやく風もすずなりになった。

答え 問1 ④ 問2 ③ 問3 ②

Ⅱ：読解問題

2009年10月12日付朝刊天声人語から

読者からいただく封書に、筆でしたためたものがある。広げつつ A 墨跡を追えば、ご用件にかかわらず背筋が伸びる。いわば正装の来客。寝ころんで接するわけにはいかない。和紙には、触れる者の居ずまいを正す力が宿るらしい。東京・王子の紙の博物館で、企画展「手漉き和紙の今」を見た（11月29日まで）。人間国宝3氏の作も端正ながら、いろんな原料と技法で伝わる郷土紙がいい。和紙とひとくくりにするのがためらわれる彩りだ。展示の紙々は、近く発刊される「和紙総鑑」12巻の一部という。京都などの有志が、10年がかりで各地の1070点を集め、和英の解説を付した見本帳である。来春にも800部が市販される。一説によると来年は、紙すきの技が大陸から伝わって1400年にあたる。以来、和紙は書画の世界ばかりか、住まいにもなじんだ。戸外の光や音、寒暑を、通すでもなく遮るでもない。障子が持つあいまいさ、しなやかさこそ、自然との「和の間合い」だろう。古川柳に〈薄墨の竹を障子に月がかき〉がある。おそらくは美濃紙の、薄いカンパスに揺れる竹林の淡影。素材として、また媒体として日本文化を担ってきた和紙の見せどころである。洋紙の世にあって、なお千種を超す紙が全国に息づくのもうなずける。博物館で、はがきの手作りを体験した。もみじを3枚すき込み、透かしを入れ、郵便番号の赤枠をスタンプで押したら、B 素人の戯れとは思えぬ一 [C] に仕上がった。この見ばえも和紙のマジックであろう。いつか札状に使わせてもらう。

問1 下線部A「墨跡を追えば」の文脈上の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 書かれた意図を思うと
- ② 書かれた筆跡を見ると
- ③ 書かれた内容の真偽を考えると
- ④ 書いた人の消息を尋ねると
- ⑤ 書いた人の思いを察すると

問2 下線部B「素人の戯れ」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 理念も思想もない者のいい加減な行為
- ② 体験や経験に劣る者の恐れを知らない行為
- ③ 経験や知識が浅い者の気楽な行為
- ④ 教えを請う者のいない自己満足の行為
- ⑤ 物事に精通せず大局を知らない者の行為

問3 空欄Cに当てはまる語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 葉
- ② 節
- ③ 枝
- ④ 冊
- ⑤ 本

答え 問1 ② 問2 ③ 問3 ①

朝日新聞社担当者より

「考える」土台を鍛え次代を担う人材を育成

社長室 教育事業センター
根岸佳代

PISA型学力の低下など、日本の子どもたちの学力不足が懸念されています。一方、大学生は社会から「社会人基礎力」や「学士力」など、非常に高度な力を要求されています。私はそれらを高めていく基礎は自分の頭で「考えること」だと思っています。そして、「考える」行為には、語彙が必要で、語彙が豊富に、高度になれば、思考も複雑になるでしょう。読解は、論理的思考をする際の訓練になり、読解で得た知識は更に思考を助けます。インターネットの普及などで世の中に「情報」があふれる今、必要なのは玉石混交の「情報」を取捨選択していく力です。また社会人になると、多くの文献や情報を使って自分の考えをまとめ、相手に理解してもらわなければならないし、学力だけでなく、言語能力を鍛えていくことは、今後社会で必要とされる能力を身に付ける第一歩となるはずで、子どもたちは、次代の日本社会を背負う人材です。子どもたちが豊かな思考で自ら考え、一人ひとりがより素晴らしい人材に育っていくことが、次の日本をつくっていくことに他ならないと考えています。

ベネッセコーポレーション担当者より

「学び、知る楽しさ」に生徒が気づく検定

高校教育事業ドメイン 経営企画室
高田貴史

近年、全国の先生方から「生徒の語彙力が低下している」との声を伺うことが多くなりました。特に、教科の専門用語などではなく、教科書に出てくる日常的な語彙でつまずく生徒が多く、それが先生の指導の負担を大きくしているようです。また、言葉は知っていても、文脈の中でその言葉がどのような意味で使われているのかを問うと、とたんに答えに迷う生徒が増えると同感です。単純に言葉の意味を知っているだけでは真の学力とは言えません。教科学力の土台となる語彙力と、文章の中で適切に使い分ける、言わば語彙の運用能力を、本検定を活用することで身に付けてもらいたいと思います。語彙力、読解力は幅広い世代の人々の考えを理解するための土台となり、コミュニケーションの幅を広げることもつながります。本検定をきっかけに、生徒が学ぶ楽しさ、知る楽しさに目覚めて、新聞や本を自主的に読むようになってくれればと考えています。日々の授業に主体的に臨む生徒を、一人でも増やせるよう本検定を開発していきます。

高校生の語彙力、読解力の現状と、その向上への取り組み

北海道旭川北高校 中村康広先生

新しい文章や言葉に触れる機会をつくる必要がある

「語彙・読解力検定」に対して、生徒の学びのモチベーションの向上や学力の検証という機能を期待する声が既に高校現場から寄せられている。生徒の語彙力、読解力の現状と、「語彙・読解力検定」の可能性を、北海道旭川北高校・国語科の中村康広先生に伺った。

中村先生は「生徒に対して、近年、特に日常的な語彙力の低下を感じる」と語る。

「難解な語の意味を間違えると



北海道旭川北高校
国語科
中村康広
Nakamura Yasuhiro

語彙力、読解力が 生徒の知的好奇心を高める

「授業では評論文などの『読み解き方』を教えることと並行して、と

にかくたくさん書かせています。生徒が考える状況を作るには、書くのが一番だろうと考えたからです。例えば、同じテーマに関する二つの文章を読ませて概要や相違点、更に自分の意見を書かせます。意見を自由に書かせることは、生徒のモチベーションを高める上で重要です」

書かせたものの添削に時間をかけるよりも、構成や表現に優れたものがある文章、接続語の工夫でもっと読みやすくなる文章など、その時々観点でいくつか作品を選び、生徒に提示するようにしている。

「語彙力、読解力を伸ばすための指導であっても、教師が面白いと感じない取り組みは生徒も面白くないと思いません。生徒の力を伸ばすには、教師も面白がるのが大切です」

生徒が「語彙が増え、言葉にこだわったから読書や授業が面白くなった」と実感し、「もっと別のものを読みたい」と思うようになることが大切だと中村先生は考えている。

「生徒の知的好奇心を高めていくのが語彙力、読解力です。新しい検定が、生徒が自らの成長を確認する機会になることを期待しています」

力
活
用
力
語
彙
力
知
識
の
関
係

語彙は学力向上に不可欠

「語彙・読解力検定」の開発に先立って、教科の語彙力と知識活用力の関係性を明らかにするために、東京大、東京学芸大、東京工業大の教授、元教授らとベネッセコーポレーションの研究開発担当者が共同でつくるNPO法人「教育テスト研究センター(CRET)」が、08年1～2月、小学5年生と中学2年生を対象に調査を実施した。

国語、算数(数学)、理科、社会の4教科において、「教科学習に関する語彙問題(24問)」と「教科知識を活用する問題(2大問)」を解いてもらい、結果を分析したところ、いずれの教科においても、語彙問題の得点が低い子どもは、活用問題の得点も低い傾向にあることが明らかになった。09年には大學生を対象にテストを実施したところ、やはり同じような関係が明らかになっている。

語彙力を上げれば知識活用力がすぐに伸びるとは限らないが、教科の用語を十分に理解することなしに学力を付けることは困難であると考えられる。語彙は学力向上を図る上で、欠かすことが出来ない要素といえる。

考えを自分の言葉で表現できる学生を

法政大

日常的な働き掛けで言葉への
関心や好奇心を育む



法政大
キャリアデザイン学部
小林ふみ子 准教授
Kobayashi Fumiko

大学の学びは、高度な語彙力、読解力を土台として主体的に調べ、自分の考えをまとめて伝えることが出来て初めて成立する。しかし近年、多くの大学で学生の正しい日本語を使う力の低下が指摘されるようになってきている。法政大で初年次教育などを通じて日々学生の指導に当たる小林ふみ子准教授も「語彙力が低下した入学者が増えており、正しい言葉で表現させる指導が必要になっていくと感じる」と語る。

「講義で知らない言葉に出合っても、自発的に調べようとしないう学生が少しずつ増えている気がします。また、資料や文献の理解が浅いため、討論の場で『うっほい感じ』と述べると、自分の考えを適切に表現できない入学生も目に見えます」

「読み書きに自信がない言葉が

あつたら辞書を引こう」と学生に繰り返し伝えることが大学教員にも必要になったと小林准教授。1年生対象の「基礎ゼミ」では、初年次教育として大学での学び方を指導するが、最近では言葉の正確な理解・表現の指導も重要な課題になっている。レポート返却の際も、誤った言葉遣いを見逃さずに指摘するなど日常的な働き掛けが重要だと言う。

「語彙力、読解力がないと、文章を咀嚼^{そしやく}できず、思考も深まりません。法政大ではセンター試験利用入試を除く多くの入試方式で論述式の問題を課していますが、これは『考えを自分の言葉で表現できる学生に入学してほしい』という大学からのメッセージです。言葉に対する関心や好奇心をもっと持ってほしいですね」

幅広い教養とコミュニケーション力を培う

立命館大

インプットとアウトプットを
学びの中に意図的につくる

入学者の語彙力の低下を各大学が

感じる一方で、学士力の確保など、大学教育に対する社会の要求は確実に高まっている。入学時から就職までさまざまな段階で学生の指導に当たってきた岡本直輝教授は、「就職活動でもエントリーシートや面接などで、語彙力や表現力が企業から厳しく問われている」と語る。

「1、2年次の段階で、自分の考えを整理し、アウトプットする経験を積んでおく必要があります。ただ、最近の学生は読書量が少ない上に、友人とのコミュニケーションも減っているように思います。学生への多様な情報のインプットの機会と、そ

れを自分の中で消化し、アウトプットする機会を意図的につくることを大学に求められています」

文系学部で1年次から実施されている「基礎演習」は、ゼミ形式で課題学習、プレゼンテーションを展開し、インプットとアウトプットを体験する。更に、説得力のある文章を書くための「実践ライティング」を一部の学部で導入している。

岡本教授自身は、学生に新聞を読んで意見をまとめ、投書させることを授業に取り入れているという。

「企業が求めるのは、幅広い教養とコミュニケーション力を持った学生であることは、内定状況からも明らかです。新聞を授業に取り入れることで幅広い角度から社会の動きを知り、また意見を書くことで、面接の場などで自分の言葉で語れる力を身に付けさせたいと考えています。語彙力、読解力の向上のための取り組みを今後も広げていきたいです」



立命館大
入学センター部長
岡本直輝 教授
Okamoto Naoki